

園番号 709

## 令和5年度 奈良市立柳生こども園 研究実践概要

園長名 西久保 和子

全園児数 16名

### 1. 研究主題

「“こころ”も“からだ”ものびのびと」

～豊かな自然の中でのもの・ひと・こととの関わりを通して～

### 2. 研究年度

3年度

### 3. 研究主題設定理由

自然豊かな環境の中、共に子どもの育成を願う地域の中で見守られ育ってきた子ども達ではあるが、「どうしたらいいの」「わからへん」と保育者を含む大人に依存し、「〇〇がしたい」「友達と一緒に昨日の続きをしたい」「〇〇をするのに必要なものは何かな」と見通しを持ちながら遊びを工夫して意欲的に遊ぼうとする姿が少なかった。研究主題3年目ではあるが、1歳児から5歳児の発達を再確認し、もの・ひと・ことと関わりながら自己を発揮し主体的に遊び込める環境を探りたいと研究主題に設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

・遊びの中で子どもの創造性や探究心が育まれている様子を探り、環境構成と援助の在り方を分析していく。

・豊かな自然の中で、もの・ひと・ことと関わり、同年齢や異年齢児の友達、地域の方々とふれあいながら心豊かにいきいきと活動する子どもを育成する。

#### ②研究の重点

・実践より子どもの姿を分析し、心を動かす瞬間や遊びを作り出すきっかけを読み取り、探求心や創造性等が育まれる環境構成、援助について探る。

#### ③活動の方法

のびのびと遊ぶ子どもの姿・・・網掛け

環境構成・・・下線

【1歳児】 11月 A児（1歳10か月）の姿「ジャンパー！」

曲に合わせて体を揺らしたり、手を動かしたり体を動かすことを喜んでいたA児。ジャンプをする場面では、膝を曲げて、跳ぼうと手を挙げている。「〇〇ちゃん、すごいね！跳べそうだね。ジャンプジャンプ！」と保育者もジャンプしながら声をかけると、何度も両手を挙げて「ジャンパー、ジャンパー」と嬉しそうな表情を見せた。保育者がA児に両手を出すと、A児が手を出し「ジャンパー！」と声をあげた。両手を引き上げ体が浮いた瞬間、嬉しそうな表情を見せ、床に足が付くと自分で膝を曲げて上へ跳ぼうとした。もう一度「ジャンプ、ジャンプ」とA児。両手を引き上げると、膝を曲げてピョンピョン飛び跳ねた。「〇〇ちゃん、ジャンプできたね」と声をかけると、保育者の顔を見ながら一本指を出して「もう一回、もう一回」と言い、手をつなごうとした。「よし！もう一回ね。ジャンプジャンプ！」と両手をつなぐと、嬉しそうに飛び跳ねた。



<考察>

日頃から、ジャンプしたいA児の気持ちを汲み取り、タイミングよく両手をつないで引き上げることで、A児が跳べる満足感を感じている姿があった。安心できる保育者との関係の中から、A児の「ジャンプ」したいという要求に応じて、気持ちを受け止め言葉で代弁した。A児が満足するまで繰り返す応答的な関わりをすることでのびのびと遊びを楽しむ姿につながった。これからも身近な人と気持ちが通じ合う経験を大切にしていきたい。

【2歳児】 10月 A児（3歳1か月）の姿「のぼりたい!!」

園庭にある高い築山を保育者と一緒に手をつないで登っていたが、自分で登りたいという気持ちが芽生えてきA児。足に力を入れて登ろうとするが、滑りそうになりなかなか進まなかった。登ろうとしても「こわいー、せんせー手もってー」と保育者に手を伸ばした。保育者に手を持ってもらったり、ハイハイで登ってみたり、手や膝を泥んこにしながら何度も何度も挑戦していた。「こうやって登ってみる？」と登る姿を見せたり、築山の上から手を伸ばし「ここまで頑張ってー」と励ましたりすると、一生懸命手を伸ばし築山を登ってきた。保育者の手まで届かず、ズズっと四つん這いで築山を滑り降りてしまった。「おいしいー、もうちょっとやった！」と声をかけると、思わずA児がにこりと笑った。「次は行けそう！頑張って」と、また保育者が築山の上から手を伸ばすと、駆け上る途中で踏ん張って、最後は保育者の手をつかみ登り切った。築山の上から、満面の笑顔で「おーい！」と手を振った。



<考察>

自分で「登りたい！」というA児の思いを受け止め、怖がっている時は手助けし、安心して挑戦できるように励ました。保育者と手をつないで支えてもらうことを喜んだり、上手いかなくて斜面を滑ってしまったりしても、保育者と一緒に楽しみながら何度も何度も自分から挑戦する姿が見られた。あと少しで登ることができるという場面での、保育者の励ましの言葉やさりげない援助が、A児の「登りたい！」という気持ちを後押しし、踏ん張ってでも登る意欲につながった。このように子どもの思いを温かく受け入れ、励ましながら意欲を育てていきたい。

【3歳児】 11月「ここまでのぼれたよ〜！」

戸外遊びに出ると、A児はチェーンネットに登り、「上までのぼったよ。先生ものぼって」と誘い、保育者と共に見える景色の様子を話していた。その様子を見ていたB児が「Bものぼりたい」と初めてチェーンネットに興味を示し、足をかけて登ろうとした。チェーンネットの2段目まで登ると「動かさないで」「のぼれないよ」「こわい、おろる、おろして」と少し怒り口調で助けを求め、その日はもう、B児がチェーンネットで遊ぶことはなかった。しかし次の日、A児が登っているとB児がやってきて、2段目までは登るが、それ以上どうやって登ればいいのかわからない様子で、「Bものぼりたいよ」と言った。「B君、昨日は怖そうにしてたけど、大丈夫？」と保育者が声をかけると「のぼりたいの」とB児。保育者は「よし、そしたら登ってみよう」「この手はもう



少し上を持って、こっちの足を上げて…」と言葉をかけながら B 児の手や足に手を添えて導いていくと 1 段上に登ることができた。「B 君、ひとつ上に登れたね。」と言うと「のぼれたよ！」と B 児は笑顔で喜んだ。その日から B 児は何日も繰り返しチェンネットに登っては「先生見て、ここまでのぼれたよ。先生も来て」と嬉しそうにしていた。「すごいね、ひとりでそこまで登れるようになったね」と言葉をかけながら B 児と同じ高さまで登った。

#### <考察>

この時期になり、生活や遊びの中で自分から友達に関わる姿が増えて、A 児や保育者と同じように「自分ものぼりたい」と思ってやってみた B 児。揺れの怖さを感じて思うようにはできなかったが、次の日もやりたいと挑戦した。「のぼりたい」と思った B 児の気持ちを大切に、頑張りを認めながら登り方を伝えた。やりたい気持ちと体の使い方をコントロールし、「できる」喜びを感じ毎日のように挑戦することにつながった。友達と同じことが、自分も頑張ればできるようになったことを経験した B 児。できたことを保育者に褒めてもらったり認めてもらったりする成功体験を積み重ねていくことで、いろいろな遊びに、自ら「したい」という意思や意欲を持つことに繋がっていくと考えられる。

#### 【4 歳児】 1 1 月「美味しそうやなあ」

キウイの皮を使いごちそうづくりをしていた A 児の隣で B 児が、クレープ紙を使って、いろいろな色のジュースをつくっていた。それぞれに自分がイメージしたものをつくろうと、近くで遊んでいても会話もなくつくことに集中していた。キウイの皮で土を巻いていた A 児に「A 君、今日はどんなごちそうできるんやろう、楽しみやな」と声をかけると B 児が興味を示し「A 君、何つくってるの？」と聞いた。「巻き寿司やで」と A 児。B 児は「あっ、そっかー。キウイの皮が海苔ってことね」と A 児のアイデアに気づいた。A 児は「そうそう、そういうこと。B ちゃんはジュースつくってるん？」と聞くと、B 児は、「そうだよいろいろなジュースをつくろうと思ってね」と答え、「これは、オレンジでしょ、これは…」とできているジュースを紹介していた。「すごいなあ、B ちゃんいっぱいつくったなあ。どれも美味しそうやなあ」「ありがとう。A 君がつくったのも美味しそうだね。後で食べさせてね」「いいよ。」と、その後もそれぞれにつくりながらやりとりが続いていた。



#### <考察>

アイデアがどんどん溢れてきて、イメージしたものをつくりあげたいと集中するが、自分の世界の中だけで遊びが終わってしまっていた。友達のしていることにも関心をもち、関わりながら遊びの時間を過ごしてほしいと思い、保育者が一言声をかけることで、互いに「何をしているのかな」と興味を持ち、イメージの共有へと繋がっていった。もの・ひと・ことに関わりながら誰かの発見に刺激を受け、興味、関心からもっと探求していこうとする原動力になっていく。今後も互いのしていることに関心をもち、「それいいね」と認めあったりする姿を十分に認め、協同性を高めていける環境を提供していきたい。

#### 【5 歳児】 1 月「氷の実験」

寒波の前日、保育者が容器に水を入れておくと「先生、何してるの」と A 児。「明日すごく寒くなるみたい。お水が凍るか実験してみようと思うねん」と伝えると「私もし

たい」とA児。「みんなでしてみようか」と提案すると他児も「したい」と好きな容器を選び、凍りそうな場所を探している。「お花も入れてみよう」とA児。「私は葉っぱ入れるわ」とB児。「いつもここは凍ってるからここにしよう（滑り台の所）」とC児。「私は木の下にしよう」とD児。「先生はタイヤの中に入れてみようかな」「私もそこにする。」とA児とB児。思い思いに氷の実験がはじまった。次の日、みんなの氷を見ていくと、タイヤの中に置いた3つの容器が1つだけ凍っていないことに気づき「なんでAちゃんのだけ凍ってないねんやろう」と不思議がるB児。「タイヤで守られてたからかな」とC児。「2つは凍ってるで」とD児。「きっとお水がいっぱいやったのと少しのお水やからと違う？入れ物の大きさも違うからや」自分の考えを言うA児。「じゃあ、もう一度同じ大きさの容器で実験してみようか」と話し合い同じ大きさの容器にお水を多く入れた容器と少しの容器を1番凍りそうな滑り台の上に置くA児とB児。次の日登園するとすぐに氷の実験の所に駆け寄っていき見ている。「先生、2つとも凍ってた」とB児。「お水、いっぱい入れたほうは中に泡みたいなのがあるよ」容器を持ち上げ「ちょっと、お水も出てる」とA児。「泡があるのは、なんでやろう」と聞いてみると、「上の方から凍るから違う」「昨日Cちゃんのも下は凍ってなかったよ、だから下はなかなか凍らへん」「じゃあ、なんで下は凍らへんのかな」と聞くと「上から寒いのがくるのかな」「横からもくるのかな」と考えを出しあっていた。



#### <考察>

毎朝、園庭に出るとは、草花や固定遊具に着いている霜を集めたり、滑り台の水たまりやプールが凍っているのを見つけたり、冬の自然現象に興味はあったが、なかなか自分達で次へと遊びを展開できない姿があった。保育者が実験しようとしている姿を見せることで、自分達も「やってみたい」と氷を作る活動につながった。

子ども達が心動く体験を通して「なぜだろう」「どうなるかな」と思いを巡らせ、伝え合うことで「不思議」が生まれた。今後も子ども達の中から出てくる「不思議」を大切にもの・ひと・こととの関わりの中から「協同性」や「思考力の芽生え」を育み、保育者も一緒に楽しくていきたい。

## 5. 研究の成果

温かい雰囲気の中で保育者が子どもとの信頼関係を築くことで、子どもが安心感を感じ心も体も安定し、生活や遊びを十分に経験できるようになる。各年齢の子どもに合った保育者の関わりと繰り返し遊んだり気づきが持てたりする環境をつくり、「やってみたい」「明日も楽しみ」と心が動き、遊びが生まれ、もの・ひと・ことに関わりのびのびと遊ぶ姿につながった。「やってみたい」と思ったことが実現でき、達成感や満足感を味わい、自信につながり、子ども達の意欲が高まったと感じる。

## 6. 今後の課題

子どもの興味・関心を捉え主体的にもの・ひと・ことに関わっていくことができよう援助をしてきた。子どもの興味・関心がどこにあるのか保育者間で思いや考えを共有し子どもの理解に努めるとともに、子どもの探求心や創造性が生まれ、子ども同士が互いに遊び込める環境構成や援助の工夫を探っていきたい。